

## 携拳の奥義

アミール・ツアルファティ

- すべての信者にとっての「祝福された希望」に関するメッセージ-

[YouTube: 「携拳の奥義」 byアミール・ツアルファティ](#)

オリーブ山の頂上から、シャローム。エルサレムの市街地が、ちょうど私の後ろにあります。ここは、地球上で最も重要な山の一つです。ここでは様々な事が起こりました。ここは、ガリラヤから来たユダヤの人々が野営した場所でもあります。祭りのたびに、彼らは最後の宿泊地であったエリコの東部から、エルサレムに向かいました。そしてここで初めて彼らが見る事が出来たのが、今日では丁度、岩のドームが建っている場所ですが、神殿、偉大な神殿です。そこがソロモンが紀元前1000年に建て、紀元前586年に破壊された第一神殿なのか、あるいは、バビロンからの帰還者によって建てられた第二神殿なのか、いずれにせよ、神殿には3つの時期がありました。第一に、建てられた時。次に、ハスモン朝が2世紀に修復した時。そしてもちろん、ヘロデ大王の時に、この山に大改装がなされました。そして大理石と金で装飾されたものが造られました。そして、エルサレムを見た事がない者は本当の美を知らない、と言われました。また、もし当時の世界に10キュビトの美が与えられるとしたら、そのうち9キュビトはエルサレムに与えられるだろう、とも言われました。エルサレムは素晴らしかったのです。エルサレムは間違いなく当時から世界の注目の的だったのです。現在は言うまでもありません。しかし、この神殿の丘が見えるオリーブ山の頂上でお伝えしたいメッセージは、ご存じのように、このすぐ下にダビデの町があります。そこは今日、争いの場所になっています。UNESCO (ユネスコ) は、ここにはユダヤ人に関する遺産はない、と実際に発言しています。しかし、私たちは遺産がある事を知っているだけではなく、もし、何か遺産があるなら、それはユダヤ人に関するものです。この場所で、三千年以上前の遺物が発見されています。つい最近、二千七百年前の巻物の一部が発見されました。それは、エルサレムにワインを送った人による送り状のような物でした。ですから、言いたい事は、私たちが立って見ている場所は、疑いなく歴代誌 第二6章6節で、神ご自身が言われた、「エルサレムを選んでそこにわたしの名を置き、」それだけではなく、神はこうも言われました。

### 「ダビデを選んでわたしの民イスラエルの上に立てた。」(歴代誌 第二6:6)

ですから、神は「わたしはここにいる」と言われ、そして、「ダビデがわたしの民イスラエルを治める場所だ」と言われたのです。そして、みんな知っている事ですが、誰かがダビデの血筋から現れる必要があります。誰かがユダの血筋から、ユダの部族から現れる必要があります。そして、彼は倒れたダビデの幕屋を、ここに建て直します。

さて、教会の携拳については議論的になる事もあります。それは、携拳がどのように起こるか正確に知らない為に、沢山の異なる意見があるか、あるいは、しばしば世界中の何千、何万もの教会に完全に無視されています。私はそれは敵の仕業だろうと信じていますが、イエスを信じるものに約束された、最も大事なと思われるものを無視する事で、間違いなく、信者の唯一の希望、祝福された希望が盗まれています。全ての信者にとっての大事な希望なのです。

今回のメッセージのタイトルは、『携拳の奥義』です。何もない訳ではありません。奥義なのです。実際、奥義とは秘密の事ではありません。秘密は秘密で、奥義は奥義なのです。聖書が奥義について話そうとする時は、聖書は奥義について話します。聖書が秘密を言いたい時は、聖書は秘密と言います。奥義と秘密は違うものなのです。奥義は隠されていませんが、影から本体に変えられており、ある時が来ると、私たちにも分かります。昔は理解できませんでした。しかし、新約聖書のヨハネの黙示録によって、今はそれが何なのか理解しています。しかし、秘密は、いまだに隠されており、私たちは知る事も感じる事も出来ません。ですから、神が秘密を明らかにされる時、私たちはそれを初めて聞くのです。神が奥義を明らかにされ

た時、私たちは「そうか」、「やっと分かった」と感じます。興味深い事に、聖書全体で、奥義という単語は33回用いられています。旧約聖書では、ダニエル書で1回用いられています。ネブカドネザル王が見た夢の奥義の事です。その奥義は、最終的に神が解き明かしました。イスラエルの神です。神は、夢の本当の意味をダニエルに示し、ダニエルが王に伝えました。その奥義は、過去に存在し、これから起こる事についてのものです。ダニエルは、ただ解釈しただけでした。ダニエルは、存在していた者についての理解を与えられたのです。ですから、これは奥義なのです。そして、奥義という単語は、ローマ人への手紙、コリント人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への手紙 第二、テモテへの手紙 第一、そして黙示録で用いられています。ダニエル書では、奥義は本当の神についての事でした。奥義は、本当の神が誰なのかを明らかにしたのです。他の全ての人は、それぞれ自分で解釈しようと試みました。しかし、本当の解き明かしをしたのはイスラエルの主、神でした。しかし、ローマ人への手紙11章を見てみましょう。そこには、イスラエルと、イスラエルに対する神のご計画についての奥義が書かれています。その意味は、イスラエルが存在してきた事、イスラエルが通りつつある事ですが、イスラエルが未来に果たす役割についての奥義もあります。ローマ人への手紙11章において、イエスと新約聖書に照らして、神は確かに全ての人に示しておられるのです。それがローマ人への手紙11章です。コロサイ人への手紙2章は、本当のメシアについての奥義ですが、コロサイ人への手紙2章2節では、こうあります。

**「神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。」(コロサイ2:2)**

それでも足りないとおっしゃるなら、エペソ人への手紙5章31-32節があります。教会とキリストとの関係についての奥義です。これは奥義です。夫と妻の関係のような奥義です。これは奥義です。なぜなら、私たちは、それ以前に聞かされているからです。神がイスラエルとの関係を述べられた時、荒野では、思い出して下さい。それはエレミヤ書2章に書いてあります。そして、今度は、教会とキリストの関係も同じ奥義だと書かれているのです。夫と妻、それは奥義です。結婚している夫婦にとっても、いまだに奥義なのではないかと思います。そして、コリント人への手紙15章51節には、直ぐに迫っている携拳の奥義が書かれています。聖書は、私たちがどう変えられるか、その奥義を伝える、と述べています。エペソ人への手紙3章6節、コロサイ人への手紙1章26節において、異邦人が神の王国を相続する事についての奥義、異邦人がどのようにして王国の相続人となるか、についての奥義があります。それは、以前には誰も理解できなかった奥義です。しかし、今や新約聖書とキリストに照らして、私たちは理解しています。神はイスラエルだけを相続人とする訳ではないのです。神は異教徒の中にすら、バアルを拝まなかった者を残しておかれました。そして、テサロニケ人への手紙 第二2章7節です。すでに働いている、不法の者についての奥義です。これは少し異なるものです。この聖句を取り上げる時、私たちは反キリストとその霊について教えます。さて、複数の奥義がある事が分かりました。黙示録にさえも、バビロンの奥義があります。しかし、今朝は、このオリーブ山の頂上で、皆さんと一緒にじっくり考えたいと思います。コリント人への手紙第一 15章51節と52節について、です。

**「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、」  
(コリント第一15:51)**

これは聖書の書き方で、私たち全てが死ぬ訳ではない、という事です。そして、これは信者に対する話し方です。なぜなら、未信者は死ぬからです。信者は、ただ眠りにつくだけです。私たちは眠りにつき、目を覚ました時には、どこか別の場所にいるのです。まるで居間で眠り込んでしまい、その間に父親がベッドに移してくれるような感じです。そして目が覚めたら、自分の部屋のベッドにいるようなものです。自分の部屋に、です。そして目が覚めて、そこにいるのです。私たちは眠ります。それだけです。そして、私たちが皆、眠りにつく訳ではありませんが私たちは、皆、変えられます。ちょうどパウロが、テサロニケ人への手紙 第一4章で言った様に。

**「それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、」(テサロニケ第一 4:16)**

次に、生き残っている私たちが、空中に引き上げられ、ですから、パウロはコリント人にも全く同じ事を語っているのです。そして、

**「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」(コリント 第一 15:52)**

興味深くありませんか？一方では、突然の出来事について語り、他方では、過程について語っているのです。突然の出来事は1秒以下、瞬きする間の事まばたです。それは、私たちの体が変わられ、ここから去る事です。瞬きする間に、私たちはいなくなるのです。それは、世界中の人が座って、私たちが眺める様なものではありません。たとえば、メアリー・ポピンズがふわふわと空に上っていく様な。違います。世界はただ、私たちがいなくなった事が分かるだけです。私たちは一瞬で、いなくなるのです。しかし、パウロは終りのラッパと言いました。つまり、すでに始まっており、その過程が続いているという事です。しかし、信者でなければ、誰も気に留めません。私たちは注意を向ける必要があります。私たちはそれを探さなければならないのです。つまり、神は世界中がラッパに注目する様に図られているのです。

1948年以降、イスラエルと教会が二つのラッパだ、と私は言い続けてきました。歴史上、イスラエル国家が回復し、教会と共存するのは初めての事です。それ以前は、イスラエルは世界中に散らされていました。彼らは自分たちの土地に帰還した民ではありませんでした。そして、彼らが自分たちの土地にいた時は、教会は存在していませんでした。ですからイザヤ書では、神はイスラエルが自分の証人だとおっしゃっています。使徒の働きでは、神は教会について、ご自分の証人だとおっしゃっています。この二つが二人の証人であり、二つの銀のラッパ。つまり、モーセが宿営を進ませよう命じられたラッパであり、会衆を呼び集めるためのラッパだと、私は信じています。そして、1948年以降、神は世界中の注目を集め、何か大きな事をしようとしている、と知らせようとされています。そして、それは、一連の鳴り響くラッパから構成されています。一つではありません。なぜなら、最後のラッパがあるからです。つまり、ラッパはすでに鳴り始めているのです。すでにその音を鳴り響かせているのです。興味深いのは、1948年に、ユダヤ人がその土地に帰還した時が最初のラッパで、1967年にエルサレムがユダヤ人の手に戻ったのが、次のラッパだと私は信じています。一連の出来事が、世界中で、そしてイスラエルで起こっている事が分かります。一連の出来事があり、最終的に最後のラッパが来るのです。多くの方が私にメール等で質問してきます。「イエスが、文字どおり、春の例祭の日に成就したように、同じ事が秋の例祭でも、携拳がラッパの祭りの日に起こると考えるのには意味がありますか？」私はいつもこう答えます。「もし携拳の日が決まっており、それがいつなのか分かるなら、あなたはイエスより優まさっていますね。なぜなら聖書には、その日、その時は子も知らない、と書いてあるからです。」分かりますか？ラッパに関しては、その日ではないと理解しなければなりません。ラッパについては季節があるのです。それで、私たちは、時と季節について話します。ラッパが鳴る季節があります。そして最後のラッパの時、私たちはここからいなくなるのです。理解できましたか？では、世界中で起こるであろう出来事について話しましょう。最後のラッパが鳴り、そして私たちは、その日、その時を知りません。しかし、私たちは時と季節は理解しています。そして、現在は、最後のラッパを待っている状態です。そして最後のラッパが鳴る時、私たちは変えられるのです。なぜ、この話をするのでしょうか？ええ、それは私たちがその日、その時を知らないからです。しかし、私はそう信じますが、時と季節を理解するのは、私たちの義務なのです。

では、携拳とは何でしょうか？興味深いのは、携拳という単語の由来になるギリシア語の単語は、テサロニケ人への手紙第一 4章17節で初めて用いられ、「引き上げられる」と訳されています。そしてこの動詞のラテン語訳は、「ラプトゥロ」です。元々のギリシア語は、「ハルパゾ」です。意味は、「運び去る」「取り除く」です。ところで、同じギリシア語の単語、「ハルパゾ」は、聖書の他の箇所でも用いられています。実際、使徒の働き8章39節にこうあります。「水から上がって来たとき、」その時、ペリポはエチオピアの宦官と馬車に乗っていましたが、聖書にこうあります。

**「主の霊がピリポを連れ去られた。」(使徒8:39)**

彼は運び去られました。彼らが水から上がった直後に、ピリポはいなくなりました。運び去られ、取り除かれ、「ハルパゾ」され、「ラプトウロ」されました。

**「宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。」(使徒8:39)**

想像できますか？この時は地上から天への携挙ではありませんでした。この時は、地上のある場所から他の場所への携挙でした。その宦官は知らされていませんでしたが、彼は喜びながら帰って行きました。コリント人への手紙第二 12章2-4節。

**「私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。——第三の天にまで引き上げられました。私はこの人が、——それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです。——パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。」(コリント第二 12:2-4)**

「引き上げられる」という単語は、コリント人への手紙 第二の同じ話の中で2回用いられています。同じ「ハルパゾ」「ラプトウロ」「引き上げられる」です。そして、これが実際に地上から天へ引き上げられた時の書き方です。この話では、天とは第三の天の事です。これは、何か馴染みのないものではありません。これは、パウロが数回用いた言葉です。そして、テサロニケ人への手紙第一 4章16-18節です。

**「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。」(テサロニケ第一 4:16)**

ですから、イエスが戻って来られる時には、大きな号令と、声と、ラッパの響きがあります。どこですか？天です。地上では、人々は自分の事に夢中です。ノアの日のように結婚したり、喜んだりしています。皆、気にもせず、聞きもしません。そして、私たちは、天で大きな騒ぎが起こっている事が分かります。今です！そして全てが起こります。

**「それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」**そして、「**こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」(テサロニケ第一4:16-17)**

ですから、携挙は、A)私たちが引き上げられ、「ラプトウロ」「ハルパゾ」、私たちは引き上げられません。

**「まず、キリストにある死者がよみがえり、」(テサロニケ第二4:16)**

私たちは彼らと空中で会い、主と空中で会うのです。聖書は、場所については非常に明確です。どこでもよいわけではありません。空中で、雲の中で、会うのです。そして、聖書にはこうあります。

**「このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」(テサロニケ第一4:17)**

「いつまでも」と言ってみてください。「いつまでも」もう一度。「いつまでも」。なぜこれが重要なのでしょうか？なぜなら、イエスご自身が教会に約束された時、イエスは天に上げられる所でしたが、彼は私

たちに約束されました。イエスは、「わたしは今から去らなければならない。去らなければ、聖霊を送る事が出来ない。今から自分は去り、そしてあなたがたに聖霊を送る。しかし、心配しなくて良い、聖霊はあなたがたを慰め、共におり、導き、」そして、

**「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」(ヨハネ14:18)**

「わたしは戻る計画を立てています。」ですから、わたしのいる所に、あなたがたもいる事になるでしょう」と言われました。つまり、教会の携挙は、私たちが永遠に主と一緒にいる瞬間なのです。つまり、それ以降、私たちは、常に彼の視界の中にいる事になります。その瞬間から、私たちが彼の視界から外れる事はなくなります。私たちは、物理的に、靈的に、精神的に彼から離れる事はありません。私たちはそこで彼と共にいるのです。ですから、敵が世界中に吹き込もうとしている事が分かりますか？「ああ、それは起こりません。」「ああ、それは過去に成就しています。」「ああ、それは事実ではありません。本当の事ではないのです。」いいですか。もし一つの約束があり、一つの希望があり、一つの熱望されている事があり、もし、あらゆる信者が期待している事が一つあるとしたら、もし皆さんが聖書を知り、その日がやがて来る事を知るなら、そして邪悪な世界、異教徒の世界、不信仰の世界、そしてクリスチャンに敵対する世界、反キリストの世界、罪深い世界は、もはや私たちの居場所ではなくなります。そして、すでにこの世界の住人ではない私たちは、私たちが属する場所に行くのです。私たちの本当の家に行くのです。そこに私たちの国籍があるのです。そして、理解してほしいのですが、これは新しい事ではありません。つまり、聖書の創世記5章24節に、神がエノクを取られたとあります。死ぬ事なく、です。これは新約聖書の言葉ではありません。そして歴王記 第二 2章12節での、預言者エリヤはどうでしょう？エリヤは腐敗する事なく、死ぬ事なく、取り上げられました。そして、もちろん使徒の働き1章9節で、イエスご自身が取り上げられました。さて、私たちはオリブ山の頂上にいますが、使徒の働き1章9節によれば、ここからイエスご自身が天に上げられました。そして、預言者ゼカリヤによれば、この場所が正に、イエスが戻られる場所なのです。イエスはお自身を与えられた後、天に上げられました。そして全てを回復した後で、彼は戻って来られます。そして、彼の王国、千年王国を建てるのです。では、なぜ携挙なのでしょう？携挙が何であるかは理解しました。なぜ携挙なのでしょう？なぜ私たちに携挙が起こるのでしょうか？それはイエスのことばによるのです。イエスは、ヨハネの福音書14章3節で言われました。

**「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」(ヨハネ14:3)**

ギリシア語で、あなたがたを迎えます、という言葉は、自分の手で行い、私たちを迎えるつもりだ、という意味になります。「あなたがたを迎えます。」何と個人的な表現でしょうか。

**「あなたがたをわたしのもとに迎えます。」そして、「わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(ヨハネ14:3)**

ですから、いつまでも彼とともにいる、と言う時、彼のいる所に、私たちもいるのです。さて、はっきりさせましょう。多くのクリスチャンは、この事を知りません。しかし、私たち全員が天国で時を過ごすのは、携挙が起こる時だけなのです。なぜなら、その後で、私たちはイエスと共に戻るからです。そして、私たちは、ここエルサレムでイエスと共に千年王国を建てます。そして千年間、私たちが彼と共にここに、この世界に、この地上にいて、そして千年後に、イエスは実際に全てを新しくされます。新しい天、新しい地、それは正にこの場所に造られる天国の事です。私たちがそこで過ごすのは、携挙の間だけです。私たちがいなくなる時です。私たちが運び去られ、引き上げられ、「ハルパヅ」され、「ラプトウロ」される時です。私たちがこの悪から引き離される時です。彼がご自分のもとに、私たちを迎える時です。

では、イエスがあなたがたを迎えに行く、と言われる時、わたしのいるところに、あなたがたもいる、と言われる時、その時、イエスはどこにいますか？これは質問です。教えを受ける時に、多くの人都在这里

間違いを犯します。いいですか。イエスはどこにいますか？私たちはどこにいて、どんな選択がありますか？イエスは天にいます。皆さんご存じですね。聖書には、イエスは神の右の座に着き、私たちのために父にとりなしをされている、とあります。ですからイエスは天におられます。私たちは？地上にいます。では、迎える時期は、どんな選択肢がありますか？イエスが私たちを彼のもとに迎えられ、彼のいる所に私たちを連れて行きます。話しについてきていますか？選択肢はそう多くはありません。私は選択肢について考えています。選択肢は天です。しかし、イエスは天にいますが、私たちは違います。私たちは初臨の際に来られた地上にいます。素晴らしいですね。しかし、これは携挙ではありません。なぜなら、それはイエスの初臨だからです。そして天です。イエスの昇天、あるいは昇天の直後です。そして地上へのイエスの再臨です。そうです。しかし、イエスの再臨です。私たちはイエスと共に戻って来るのに、どうしたら携挙があり得るのでしょうか？そして、新しいエルサレムの時。もちろん、これは意味をなしません。なぜなら、新しいエルサレムは、イエスが全てを新しくされた後だからです。となると、唯一、意味を成すのは、唯一、本当にあり得るのは、イエスが昇天された後です。彼がいなくなり、聖霊が送られる時です。ちょうど、キリストの昇天と、彼の地上への再臨の間に、それが起こるでしょう。どれくらいの人が、新しい「西暦70年理論」を信じているか、ご存じですか？神殿が西暦70年に一度破壊されましたが、それが聖書の全ての預言の終りだと本当に信じる人たちがいます。彼らは、それでおしまいだ、と本当に教えています。今は、全ての人が救いに預かる事ができ、全ての人が救済を得て、今や、全てが回復され、必要なのは、「やあ、イエス」と言う事だけです。皆さんに言います。これは聖書で述べられている事ではありません。これはダニエルが言った70週の事ではありません。そして、間違いなく、イエスご自身が言われた事でもありません。なぜなら、私に関する限り、私が最後に聖書をチェックした時、携挙はまだ起こっていませんでした。ですから、どうして全ての預言が成就する事があり得るのでしょうか。まだ、誰も空中に引き上げられていないのに。さて、皆さんが理解する必要があるのは、感じる事は出来ても、見る事は出来ない戦いが起こっている、という事です。聖書の、エペソ人への手紙6章12節で書かれています。

**「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」(エペソ6:12)**

ですから、戦いが起こっているのです。それは見る事は出来ませんが、確かに感じる事が出来るのです。しかし言っておきたいのは、私たちが見る事が出来ない戦いは、天に戦場があり、最終的には地上に降りてきます。天は神に支配されており、そして神の選びにより、キリストがそこにいます。しかし不幸な事に、この世界はこの世の君、サタンに支配されています。人間がそれを選んだのです。そして、将来はサタンの遣わす人間に支配されるでしょう。彼は生まれ変わり、サタンの生まれ変わりで、反キリストその人です。反キリストはすでに地上に存在しているだけではなく、そして不法の秘密がすでに働いているだけではなく、やがて現れ、この世界全体の究極の支配を手にするでしょう。そして、現在は天で起こっている戦いが、この世界に来るでしょう。今は、戦場は天にあります。反キリストはまだ地上にはいません。竜とその使いたち、ヨハネの黙示録12章の有名な戦いは、空中で起こっています。しかし、聖書には、戦いは地上に移ると書かれています。竜、サタンは地に投げ落とされるでしょう。そして、竜が落とされると同時に、艱難時代が始まるでしょう。ヨハネの黙示録12章の戦いで、サタンは天で敗れ、地上に下るのです。非常に驚くべき事です。そして、ヨハネの黙示録19章で、サタンは地上の戦いでも敗れます。ヨハネの黙示録12章で、彼は天での戦いに敗れ、地に下り、ヨハネの黙示録19章まで支配し、そして彼は、地上でも敗れるのです。そして、私たちがなくなった時に、その戦いは、残った人を巻き込み、地上で行われます。聖書には、女が男の子を産む、と書かれています。そして聖書には、彼女の子孫の事が書かれています。女はイスラエルの民で、主イエスと、イスラエルの子孫を産みました。世界中のユダヤ人が、反キリスト自身によって迫害されるでしょう。非常に興味深いですが、聖書は、この世界での私たちの立場について述べています。

今、ちょうど私の後ろから、皆さんも聞こえるでしょう。もしかしたらぼんやりと、あるいははっきりと。私ははっきり聞こえます。ムスリムの祈りの声です。この付近に約千五百ヶ所あるモスクから聞こえます。しかし、一つ言える事があります。確かに現在は、この場所を支配しているのは闇の王国です。そし

て、こうも言えます。外交のしきたりに<sup>のつと</sup>則れば、戦争が遂行される前に、大使は帰国するよう呼び戻されます。歴史を調べてみれば分かりますが、大使は常に呼び戻されてきました。なぜ大使の話をしたのか、分かって頂きたいのですが、なぜなら、コリント人への手紙第二 5章20節にこうあります。

**「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。」**  
(コリント第二 5:20)

私たちは、大使、使節なのです。肩書があります。地位があります。私たちには任命書があるのです。イエスを受け入れた時から、私たちは使節になったのです。そして、使節は、地上で戦争が起こる前に召還されます。ですから、携拳はいつ起こりますか？私たちは携拳が何であるか理解しています。なぜ携拳が起こるのか、携拳とは何か理解しました。では、携拳はいつ起こるのでしょうか？主が戻って来られる時、教会は共に集められると約束されています。ギリシア語で“エピ・スナグゲス”と言い、シナゴグという単語の語源です。彼の下への「集まり、集会」です。彼の下に寄り集まる事です。テサロニケ人への手紙第二 2章1節。ここに携拳の約束があります。御怒りではありません。ヨハネの黙示録3章10節と同じ見方です。イエスがこう言われました。「あなたを守ろう。」 「～から守ろう」、の「から」は、ギリシア語で“ek”です。「～から離れて」という意味があります。「全世界に来ようとしている試練の時には、」教会は、「～から守る」でもなく、「～を通る」でもなく、「試練の時には、」である事にご留意ください。繰り返します。教会は試練の時「から守られ」ます。「を通る」ではありません。ですから、私たちが艱難時代を通る事は無いのです。なぜなら、聖書のテサロニケ人への手紙第一1章にこうあります。

**「やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエス」** (テサロニケ第一 1:10)

テサロニケ人への手紙第一5章にこうあります。

**「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、」** (テサロニケ第一 5:9)

そしてこう書かれています。「今しているとおり、互いに励まし合い、」 (テサロニケ第一 5:11)

この言い方で、誰かを励ます事ができるでしょうか。「ねえ、凄くない？僕たちは艱難時代を通るんだよ？そして首を切られるんだって！賭けをしてみない？」言いたいのは、互いに励ましあうために何が出来るだろうか、という事です。互いに支えあい、助け合うとはどういう事でしょうか？希望は何ですか？破滅的で陰うつな状況で、それが希望だという事が出来ますか？聖書の預言は、破滅と陰うつについてではありません。私たちは世界がどこに向かおうとしているか知っています。そして、この世界が全ての人をどこに向かわせているか、知っています。しかし、私たちは自分の未来と希望と運命を知っています。私たちが破滅と陰うつに陥る事は決してありません。祝福された希望を知っているからです。そして祝福された希望とは、恐ろしい艱難時代を通る事ではありません。イエスが、私たちをこの試練の時から守ってくださる事です。私たちは引き上げられ、取り除かれます。ちょうど、ノアが洪水の前に移されたように。ちょうど、ロトがソドムが滅ぼされる前に、移されたように。神は、不義な者を裁く前に、正しい者を取り除かれるのです。これが神です。私が仕える神です。私が知っている神です。興味深いですね。

さて、私たちは、携拳とは何か、なぜ携拳なのか、携拳がいつ起こるのかを理解しました。しかし、携拳されるのは誰でしょうか？携拳には順番がある事を理解しなければなりません。最初に、イエスご自身が天から下って来られます。ヨハネの福音書14章1-3節、テサロニケ人への手紙第一 4章16節です。メモしてください。イエスご自身が、です。ヨハネとパウロは、何故どちらも、「イエスご自身」という言葉を用いたのでしょうか。これが例え話だと思える人は誰もいないでしょう。あるいは、比喩的に言っているとか、多分何々という話だとか、あり得るとか、～のはずだ、とか。彼、彼自身が来られるのです。他の誰でもありません。ですから、キリストご自身が天から下って来られるのです。さて、私が最後に調べた時は、下っ

て来る、は、降りる、という意味でした。ですから、キリストはご存じのように、上の方、天におられます。そして、天を離れ、下って来られるのです。二番目です。

**「また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」(ヨハネ14:3)**

ヨハネの福音書14章3節です。「迎えます」です。ですから、彼はこの場所に降りてこられます。私を見て下さい。迎えのための手、です。彼はこのようにして来るのです。馬に乗って来るのではありません。手に剣を持って来るのではありません。焼き尽くすために来るのではありません。彼は破壊するために来るのではありません。彼は、私たちが彼の下に迎えに来るのです。お分かりでしょう。再臨と混同してはいけない理由がこれなのです。再臨の時は、馬に乗って、全ての敵を滅ぼす備えをして来られます。彼は来られるのです。彼は降りて来られるのです。私たちが彼の下に迎えるために来られるのです。

三番目。彼は瞬<sup>まばた</sup>きする間に来られます。神のラッパの響き、号令とともに来られます。コリント人への手紙第一 15章52節、テサロニケ人への手紙第一 4章16節。<sup>またた</sup>瞬く間です。非常に早いでしょう。驚くべきものになるでしょう。突然の事になるでしょう。迅速で素早いものになるでしょう。驚くべきものになるでしょう。しかし、私たちがいなくなる事に気づく人はほとんどいないでしょう。段階的に起こる訳ではないからです。瞬く間の事なのです。パーン！そして私たちはいなくなります。彼は降りてきます。彼は雲の中に降りてきます。そして私たちは地上から運び去られて、雲の中で主と会うのです。イエスの昇天を記したような聖句は、携拳にはありません。なぜなら、イエスの昇天は、弟子たちが目撃していたからです。聖書は、使徒の働きの中で、こう語っています。ガリラヤの人たちが、立って、彼が上られるのを見ていました。そして、彼らはただ天を見つめていました。そして御使いが言いました。ガリラヤの人たち、何をしているのですか？ええと、ここで1時間くらい待っています（笑）この同じイエスが、彼は、御使いは言いました。同じイエスが、声に出してみましよう。「同じイエスが」、同じイエスが、またおいでになります。同じ有様で。ですから、彼は戻って来られ、オリブ山の上に立たれます。しかし、私たちも、世界中の人も、私たちが上げられるのを見る事はないでしょう。弟子たちが、イエスが上げられるのを見た時とは違って。それは、束の間の事だからです。

次に四番目です。イエスは、まずキリストにある死者をよみがえらせます。ですから、生きている者だけに希望がある訳ではありません。イエスが天に上げられた後、どの時点で眠った信者も、あらゆる信者が、その希望を持っていました。そして、その希望を持つべきでした。希望を持って生きるべきでした。たとえ眠ってしまったとしても。実際、私たちが引き上げられる前に、眠った人たちが墓から出されるのです。テサロニケ人への手紙第一 4章14-15節に書かれています。

そして五番目です。その時に生きている者は、空中に引き上げられます。携拳されます。コリント人への手紙第一 15章51-53節と、テサロニケ人への手紙第一 4章17節に書かれています。私たちは地上にいます。イエスは戻られる必要があります。イエスは私たちが迎える必要があります。この事は迅速である必要があります。死者がまずよみがえり、私たちが上がります。携拳と再臨は、同じものですか？これは多くの人が犯しやすい、よくある間違いなのです。皆さん、携拳では、イエスが教会に戻って来られます。一方、再臨では、イエスは教会と共に戻って来られます。大きな違いです。テトスへの手紙2章11-13節。

**「というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福された望み、(中略)を待ち望むように」  
(テトス2:11-13)**

ここで、パウロはこう言いました。「(祝福された望み)、そして・・・」彼はこう言う事も出来たはずです。「(祝福された望み)、すなわち、イエスの栄光ある現れを」と。彼はそう言いませんでした。彼は、「～、そして栄光ある現れ」と言ったのです。ですから、祝福された望みとは、栄光ある現れの事ではありません。祝福された望みとは、携拳の事です。栄光ある現れ、とは、イエスが戻られ、イエスキリストが主であると全ての目が見、全ての膝がかがむ時です。ヨハネの黙示録1章7節。



**「見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。」(黙示録1:7)**

つまり、再臨の時、イエスが私たちと共に来られるのを、全ての目が見るのです。しかし、携拳の時は、世界はイエスを見る事はありません。イエスが来られるのは空中までで、私たちは、急に運び去られます。つまり、テトスへの手紙に、祝福された望み、とあるのは、携拳の事なのです。そして栄光ある現れ、それは再臨の事です。覚えてください。私たちは携拳され、イエスの下に行き、そして決して離れません。私たちはいつも彼と共にいるでしょう。つまり、その時以降、イエスがおられる所に、私たちもいるようになります。ですから、イエスが戻られる時、私たちも戻ります。彼は統治するでしょう。私たちも共に統治します。彼は全てを新しくするでしょう。私たちはそこにいます。新しいエルサレム、私たちはそこに属しません。以上です。それで十分です。ゼカリヤ書12章10節。

**「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。」(ゼカリヤ12:10)**

私たちがイエスと共に戻る時、

**「彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」(ゼカリヤ12:10)**

これが栄光ある現れであり、再臨です。携拳ではありません。旧約聖書の時代の聖徒たちは、どうなるのでしょうか？興味深いです。そう思いませんか？いいですか。旧約聖書の時代の聖徒たちの甦りは、再臨の後に起こります。それはメシア的王国への備えのためです。理解しましたか？旧約聖書には、聖徒たちは結婚式の花婿の友人たちになる、と書かれています。理解できましたか？結婚の宴会の事です。しかし、結婚の宴会が開かれるのは、地上だけです。それは、メシア的王国の始まりとして行われます。再臨の前に、天で行われるのは結婚式です。しかし、結婚の宴会自体は地上で行われ、メシア的王国が始まるのです。地上での千年王国の事です。つまり、最初はキリストにある死者と、生きている私たちだけです。そして、私たちが戻ってメシア的王国を先導したら、旧約聖書の聖徒たちがよみがえるでしょう。キリストは、この世界をここで治めます。

新約聖書の聖徒についてはどうでしょうか？メシアの時代に死んだ聖徒たちの復活は、旧約聖書の聖徒の、朽ちない体への復活とは違います。ただ自然のままの体に戻り、これらの人々は、その後、再び死にます。いいですか、イエスが十字架に掛けられた時に何が起こりましたか？多くの人々が生き返りました。覚えていますか？しかし、その人々は、後に再び死にました。理解しましたか？彼らは何故、永遠に続かなかったのでしょうか？それは、イエスの復活が起こるまでは、誰も永遠に生きられなかったからです。分かりますか？大事な所です。メシアご自身の復活までは、誰も朽ちないものによみがえらされる事はなかったので、そして、この聖徒たちは、メシアの死の後に、復活の後ではなく、生き返ったので、彼らはただ自然のままの体に回復され、朽ちないものによみがえらなかったのです。ですから、ここエルサレムの墓地で生き返った人々は、最終的に死にました。ラザロと同じです。ラザロも生き返りましたが、後に死にました。このため、私はいつもこう言っています。イエスがこう言われた時、「今からわたしは去ります。わたしは聖霊をあなたがたに遣わします。あなたがたはわたしより大きな事をするでしょう。」私は時々考えます。私たちがイエスより上手くできるだろうか？と。そして、主は私に示して下さいました。もちろんです。イエスは人々を死から生き返らせて下さいました。あるいは、見えない人の目を開いて下さいました。麻痺のある人を、歩けるようにして下さいました。でも、彼らは最終的に皆死にました。皆さんが、皆さんが誰かを主の下に導いたら、その人を第二の死から救った事になります。いいですか。問題は再び歩ける様にする事でも、見える様にする事でも、今ここで死者を生き返らせる事ですらないのです。問題は、第二の死はどうなのか、です。皆さんはそれから逃れていますか？それが、今日、誰かをキリストに導く事が、見えない人の目を開く事よりも、10倍まさ優っている理由です。肉体の目を開く事より、霊的な目を開く事の方が大事で

す。いいですか、38年間麻痺したまま、ベテスダの池にいた人ですが、ヨハネの福音書5章に書かれています。私は、彼を天国で見かけるだろうとは思いません。なぜか？彼のした事全て、彼は悔い改める事なく、イエスを裏切りました。彼は確かに肉体的に回復されました。しかし、精神的、霊的にはありませんでした。ですから、全ての皆さんを励ましたいと思います。もし、時間があり、教会として出かけて行き、伝道し、奉仕し、人々をキリストに導き、それで、その人々が第二の死から逃れられるなら、それがその時です。私たちがいなくなる直前です。なぜなら、それで終わりだからです。

それで、携拳とは何ですか？キリストの私たちとの約束です。携拳とは、信者にとっての祝福された望みです。携拳とは、この悪い世界と悪い者から私たちが助け出される事です。携拳とは、聖徒たちが集まる事です。知っていましたか？携拳とは、世界中の信者に会える唯一の機会です。それは、世界中の全ての聖徒たちが、初めて集まる、最初のカンファレンスなのです。皆さんは、遂に自分の兄弟姉妹が分かるのです。そしてもちろん、携拳は、多くの人にとって最後の機会です。なぜなら、一度、世界がひどく盲目になり、ひどく欺かれる様になったら、多くの人にとって、イエスを受け入れる事が難しくなるからです。皆さんが、ヨハネの黙示録16章を読んだら、人々は、盲目にされるだけではなく、ひどく欺かれるので、人々がそれを知った時でさえ、それを知った時でさえ、つまり、神はそれら全ての災害を止める権威をお持ちだ、と知っても人々は悔い改めず、神に栄光を帰すことをせず、神の御名を冒瀆するのです。それは、完全な、完全な盲目であり、欺きです。ですから、今日、私は誰にもこう言う事は出来ません。「ねえ、ところでさ、もし携拳されなくてもね。次の機会があるんだよ。心配ないよ。」違います。それが唯一の機会かもしれない。備えが出来ている必要があるのです。ですから、これが、教会の携拳が、こんなにも議論的になる理由なのです。なぜなら、サタンは、これが最後の機会だと、人々に知られたくないのです。サタンは信者に希望を持って生きて欲しくないのです。サタンは、この邪悪な世界での私たちの唯一の希望を奪いたいのです。

私は、私たち全員が、悪魔の企みを理解するよう祈ります。そして、イエスご自身が約束して下さった祝福された望みを捨てないように。そして確かに彼が来られ、全てを再建して下さるように。早く、とても早く、私たちが王に会えるように。

アーメン。



メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel :<http://beholdisrael.org/>  
ビホールドイスラエル 日本語 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvC6Mr63AqwiiXDkwRVQ>

2020.09.02 (Wed)